
幽霊と弥三郎

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

幽霊と弥三郎

【Nコード】

N9369B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

安土桃山時代の話である。弥三郎は川辺で逆さまに宙に浮かぶ奇怪な女と出会った。女と話をするうちに彼は人の業の深さを知ることになる。江戸怪談集という古典にあるお話をそのまま小説にしてみました。

第一章

幽霊と弥三郎

戦国時代の話である。織田信長の家臣に端井弥三郎という男がいた。

眉目秀麗の美男子であり文武二道を嗜む男であった。彼はその才を信長にも愛され側に仕えていた。

さて信長にはよく知られた趣味があった。彼は男色を愛しており色々とその道の相手を持っていた。その彼に仕える弥三郎も例外ではなくある美しい若者と付き合っていた。

「御主も捨ててはおけぬのう」

信長はその話を聞いて笑って彼にそう述べた。自分も嗜んでおりそれに関してとやかく言うことはなかったのである。

弥三郎はその言葉に悠然と笑う。肯定の笑みであった。

「だがよい」

信長がそれを咎める筈もなかった。彼も嗜んでいるからだ。

「節度を守ればな」

こうして彼の男色を笑って認めていた。彼は若者の家を夜な夜な通っていた。

この日もそうであった。夜詰の後で若者のところに向かっていた。彼は真夜中の山の中を一人進んでいた。雨が降る中を蓑と雨傘を身につけての夜道であった。

雨はそれ程激しくはない。だが暗い夜道での雨である。それほどうしても嫌なものに感じてしまう。だが彼は若者に会う為にそれを我慢して進んでいたのである。

暫く進むと川が見えてきた。いつも渡っている川である。そこを渡れば若者の家もすぐである。彼はその川を見て安心したように微笑んだ。

「もうすぐだな」

そう呟いて川の岸边にやって来た。そして船を捜す。

船が一艘あった。だが残念なことに人がいない。渡し守りは雨の為に休んでいるのかと思った。

「さて、どうするべきか」

彼はそれを見て少し弱った。だがこの渡し守りは顔見知りでその家も何処にあるのか知っている。そこまで言っただけで話をしようかと思っていた。

暫し考えてそうすることにした。それで家に向かおうとしたところで川上にあるものを見た。

それは火であった。夜だからかなり目立つ。だが雨の中で火とは実に妙なことだと思い見ているとそれは徐々に近付いてきた。

「何じゃあれは」

よく見るとそれは女であった。死に装束で髪をざんばらにしていた。それだけでも充分恐ろしいというのにこの女は何と身体を逆さまにして川の上を飛んでいた。そして火は口から噴いているものであった。何とも恐ろしい姿であった。

「化け物か」

弥三郎はそれを見てすぐに刀を抜いた。そうとしか思えずそうならばすぐに成敗するつもりだったのだ。

だがここで女は言った。実に苦しい声で。

「お待ち下さい」

「待てと申すか」

「はい」

女は弥三郎の目の前までやって来て述べた。身体は相変わらず逆さまで宙に浮かんでいる。

「私はこの川の向かいの村の者でした」

「そうだったのか」

弥三郎はその話を聞いた。だが警戒は緩めてはいない。

「その庄屋の女房だったのですが」

「何かあったのか」

「はい、亭主には妾がおりまして」

声がさらに苦しいものになってきていた。その苦しさはどつちら心からくるものであるうことは彼にもわかった。

「その妾と計って私を殺したのでございます」

「ふむ」

弥三郎はそれを聞いて頷いた。

「酷い話であるな」

「お侍様もそう思われますか」

「我が国のことは知っておろう」

この場合は織田信長の領地という意味である。信長は領民にとってはいい殿様であった。政治に細心の注意を払い公平で確実な政治をすることで知られていた。実は信長という男は戦争よりも政治の方に才能がある男だったのである。

彼の政治は一言で言うると悪人には厳しい政治であった。罪人は何処までも追い詰め処罰する。その処刑は実に惨たらしいのが信長らしいと言えばらしかった。そういう政治だったので信長の領地では治安が実によかったのだ。

「そうした輩は成敗する」

彼もまたそれをよくわかっていた。だから言葉が厳しいものになっていた。

「その様なこと、見過ごしには出来ぬな」

若者とのことはもう頭の片隅に追いやっていた。それどころではないのがはつきりとわかっていた。

「してじゃ」

「はい」

「御主は幽霊であるな」

「左様でございます」

女は答えた。

「左様か、やはり」

弥三郎はそれを聞いてまずは頷いた。

「しかしじゃ」

「何でしようか」

「さっきから妙に思っていたのじゃが」

「はい」

女は弥三郎の言葉に応える。弥三郎はそれを受けてさらに言つ。

第二章

「その方、どうして逆さまなのじゃ」

彼はそれについて聞いてきた。

「幽霊なのはわかったが」

「実はこれにも深い訳があるのです」

女は弥三郎を見上げてさめざめと述べた。その青白い顔が実に悲しげであった。

「実は夫と妾に殺された時にです」

「うむ」

その話を聞くことにした。どうやら事情があるとわかったからだ。

「私は絞め殺されてしまいました」

「それはよくあるじゃろ」

それで逆さになるとは思えなかった。別の事情であると思った。

「はい、無論それが理由ではありません」

「ではどうしてじゃ」

「ここの川上に逆さまに埋められてしまったのです。こうして頭から」

「そうした事情じゃったのか」

話を聞いてようやく納得がいった。聞けば実に妙な事情ではあった。

「はい、どうやら怨念を被らないようにと考えたようでした」

女は悲しい顔で語る。

「実際にこれではあまりにも不便で。何も出来ない有り様です」

「そうじゃろうな」

弥三郎はその話を聞いて納得したように頷いた。人とは普通に立つて動くものである。それが逆さまになっては何事もやりにくいものだ。彼は夫とその妾のしたことに妙に納得した。

だがそれを許せるわけではなかった。彼はそれを聞いて怒りがふ

つふつと沸くのを感じた。それは雨の中でも燃え上がるものであった。

「しかし」

彼は怒りを含んだ声で述べた。

「その亭主と妾は許せぬな」

「お侍様もそう思われますか」

「左様じゃ」

彼は答えた。

「織田家においては悪は許されぬ」

「左様でございますよね」

これは信長が常に言っていることである。

「そなた、恨みを晴らしたいか」

「そう言っただうえで女に問う。」

「殺された恨み。どうじゃ」

「殺されてそれを恨みに思わない者がいましょうか」

女はかえってそう問い返してきた。

「無論私も同じです。ですがあの二人はそれを見越して私をこうしたのです」

「たのです」

「そうであつたな」

話は戻った。逆さまにされた話である。

「左様です。川も満身に渡れない有り様で」

「何もかもが辛いというのか」

「それで力を貸して頂ける方を待っていたのですが」

「それがわしか」

「はい」

その言葉にこくりと頷いてきた。

「駄目でしょうか」

「いや」

それを断る弥三郎ではなかった。彼は織田家の中でも有名な武辺者であった。主である信長をはじめとして傾奇者が多い織田家であ

る。彼等は武辺であることを誇りにしていたがこの弥三郎はその中でもとりわけその名を知られた男であったのだ。その彼が断らない筈がなかった。

「聞けばこれは悪だ、悪は討たなければならん」

「それでは」

「うむ、その頼み喜んで引き受けよう」

「かたじけのうございます」

「それでじゃ」

弥三郎は話を受けたうえでまた女に問うた。

「わしがその亭主と妾を成敗すればよいのか」

「いえ」

だが女はそうではないと言ってきた。

「まずはですね」

「うむ」

「川を渡らなければ話にならないのです」

「川をか」

「はい、何分亭主も妾も向こうにおりますので」

「ああ、そうじゃったな」

弥三郎はその話を聞いて頷いた。先程からの話ではそうなる。言われてそれを思い出した。

「それではまずは川を渡るか」

「はい、渡し守りに会いに行くぞ」

「畏まりました」

こうして弥三郎は歩いて、女は逆さまになったまま宙を浮かんで渡し守りの家に向かう。そして扉を叩いて呼ぶとその渡し守りが眠い目をこすって出て来た。

「はい。川ですか？」

「そうじゃ。少し頼みたいのだが」

「はあ。それで一体どなたを」

「わしとな」

「弥三郎様と」

この二人は顔見知りである。何度も行き来しているうちにそんなつたのである。

「この女じゃ」

「女……」

渡し守りはそれを受けて弥三郎の後ろに目をやった。そしてその青白く恐ろしい形相が下から見据えているのを見てあっという間に気を失ってその場に倒れてしまった。

「どうしたのでしょうか」

「御主の姿を見たせいじゃな」

彼にはすぐに合点がいった。それで女に対して述べた。

「やはり私が幽霊だからですか」

「まあ無理もないな」

正直こう述べるしかなかった。

「幽霊でさえ恐ろしいというのにそうして逆さまになっていればな」

「そうなりますか」

「それはわかるじやろう」

女に顔を向けて言った。

「御主もついこの前まで生きておったのじゃからな」

「ええ、まあ」

女は弥三郎を見上げてしよげた声で答えた。

「いささか残念ですが」

「仕方のないことじゃ。しかし」

彼はここで気絶してしまった渡し守りを見た。

「これではとても船を操ることはできぬな」

「どう致しましょうか」

「何、困ることはない」

だが弥三郎はそう言って女を安心させてきた。肝心の渡し守りが倒れてしまったというのに彼は落ち着いた様子であった。

第三章

「まだ手はある」

「どうされるのですか？」

「わしがおる」

弥三郎はこう述べた。

「わしが櫂を手にしてそなたを川上まで送ってやろう」

「宜しいのですか？」

「こうしたことには慣れておるからな」

織田信長の領地である尾張や美濃は川が多い。船での行き来が盛んである。その為弥三郎も船を動かすことができるのである。実際に信長は美濃を攻略する際には船をよく使っている。

「だから任せよ」

「ではお願いします」

「行くか」

「はい。灯りですが」

「何かあるのか？」

「はい」

女はこくりと頷いてきた。

「ございます」

「わしも火打ち石なら持っているがな」

弥三郎もそう言ってきた。女に対して全面的に協力するつもりであつたのだ。

「いえ。それ也不需要ありません」

「必要ないと」

だがこう言われると何か妙な感じを抱かずにはいらなかった。

「というと」

「私は幽霊ですのぞ」

女は目の前に火の玉を出してきた。青白い火の玉が彼女の前にゆ

らゆらと現われてきた。

「ほう」

弥三郎はそれを見て声をあげた。

「それか」

「左様です。これでどうでしょうか」

「これはよい灯りじゃ」

感心することしきりであった。これは流石に思いも寄らなかったが充分過ぎる程であった。

「それではそれでな」

「はい。これで宜しいでしょう」

「うむ。それではな」

「はい」

彼等は舟に乗り川上の村に行くことにした。その際弥三郎はふと思い出すことがあった。

「おっと」

「どうなさいました？」

「いや、大切なことを忘れるところであった」

彼はにこりと笑って女にそう述べた。

「大切なこととは」

「金じゃ」

「金!？」

「舟を借りるのじゃからな」

そのうえでまた言ってきた。

「ちゃんとその分は払ってはおかねば」

「そうでしたか」

「ここで金を払わないとあつてはな」

彼は女に対して言う。

「後で殿に打ち首じゃ」

「そうなのですか」

「我が殿は実に厳しいお方」

これは本当のことであつた。織田信長という男は家臣に対しても実に厳格な男であり些細なことも見逃さない。その為家臣達も極めて慎重になつていた。行軍の際女の顔を覗いて首を刎ねられた者もいるし織田の一銭斬りとまで恐れられた。これは信長自身が手討ちにすることも多かつた。女の顔を覗き込んだ者は実際に信長自身によりその場で首を刎ねられているのである。

「そうしたことは気をつけねばな」

「それではその様に」

「うむ」

弥三郎は頷いた。そしてまだ気絶している渡し守りの側に幾らかの銭を置いたのであつた。

「随分多いですね」

「わしの気持ちもある」

女に対して言った。

「こういうことも忘れるなど。殿にも言われておるのじゃ」

「はあ」

「それではな」

銭を置いてからようやく向かうことになった。

「行くとするか」

「わかりました。それでは」

彼等は舟に乗り込んだ。そして女の火を灯りとして弥三郎が櫂を操り川上に向かうことになった。女は船頭で逆さまに浮かんでいた。弥三郎は暗い川を見事に櫂で進んでいた。話通りのことはあつた。

「凄いですね」

「慣れじゃ」

弥三郎は女に述べた。

「先程申した通りじゃ」

「してじゃ」

彼はそう語つたうえでまた女に尋ねた。

「わしはそこで何をすればよいのじゃ」

こうなつては乗りかかった船だから完全に協力するつもりであつたのだ。その庄屋も妾もこの手で成敗してやるつゝ、そもも考えていたところだ。

しかし女はここでこう言ってきた。

第四章

「いえ」

「どうしたのじゃ？」

「御言葉ですが私一人でやらせてもらいます」

「御主一人ですか」

「左様で」

女は答えてきた。

「それでは駄目でしょうか」

「できるのじゃな」

弥三郎は懼をこぎながら尋ねてきた。女はただじつと前を見ていた。

「はい。お任せ下さい」

「わかった」

その言葉の強いことを見て彼も決めた。ここは彼女に任せてみようと思ったのだ。

こう思ったには実は訳がある。それはやはり彼女が幽霊であるからだ。その恐ろしさは人のそれとは比較にならないのは言つまでもないからである。

「ではそれで行くぞ」

「はい」

そう取り決めて川上に向かった。辿り着いたところはごく普通の村であった。

「さて」

その村に着いたところで弥三郎は女に声をかけた。

「ここじゃな」

「そうです」

女は舟の上から岸の上にあがって答えた。弥三郎もそこにいた。
「着いたな」

「はい」

「それではこれから」

「行って参ります」

「もつか」

「はい。ここに辿り着きましたらもう迷うことはありません」

声が恐ろしいものになっていった。それを聞いて弥三郎も内心かなり恐ろしいものを感じていたがそれは表には出さなかった。武者としての意地である。

「さすれば」

女は飛んで行った。そのまま村の中へ入る。弥三郎がそれを追えば村の奥の一際大きな屋敷に入って行った。そして一瞬だけが叫び声がした。

それは男のものや女のもの両方あった。それが聞こえてすぐに女が戻ってきた。

相変わらず逆さまのままであったがその顔は晴れやかなものになっていた。そのうえその側に男女の首を漂わせていたのであった。

弥三郎はその首が誰のものであるのかすぐに察した。

「それが御主の亭主とその妾じゃな」

「左様で」

女はその晴れやかな顔で答えてきた。

「これで見事恨みを晴らすことができました」

「それはよかった」

「これが果たせたのもお侍様のおかげです。まことに有り難うございます」

礼を述べると女はすうつと消えていった。その晴れやかな顔が実に心に残るものであった。

女が消えると二つの首はそのまま落ちた。夜の中に転がるその首を見て弥三郎はこれからどうしようかと思った。

「夜じゃしな」

まだ夜は深かった。ここで彼は最初の目的を思い出した。

「まだ時間はあるし」

彼は予定通り若者のところに向かうことにした。とりあえずは首をそのままにして村を去った。そして渡し守りのところに戻りようやく目を覚ましていた彼に声をかけて若者のところに向かった。そして床の中でこのことを若者に話すのであった。

「それは奇妙なことでございますね」

「うむ」

弥三郎は若者の言葉に頷いた。

「やはりそう思うか」

「このこと上様にも話されますね」

「無論じゃ」

彼は答えた。

「話しておかねばなるまい」

「そうですね」

若者もそれに頷いた。確かにそうすればいいと思った。

「まあ問題がないわけでもない」

「問題とは」

「上様がな。この話を信じて下さるかどうか」

弥三郎はそう言つて顔を顰めさせた。

「それが問題じゃ」

「それがありましたか」

「そうなのじゃ」

信長は今もよく知られているように現実的な性格である。目に見えないものは信じない性格だ。その彼がこんな話を信じるかどうかというと甚だ疑問であるのだ。だが弥三郎はそれを言おうと決めていた。

「じゃが言つしかあるまいな」

「そうするしかありませんね」

若者もそれに同意した。こうして彼は信長にこのことを報告することにした。

信長は岐阜の城にいた。そこで弥三郎の話を聞くのであった。
「以上でございます」

主の間で彼は報告を終えた。そして頭を垂れていた。信長はそれを頷きもせず聞いていた。だが聞き終えてからその鋭利で整った顔を動かしてきた。

「その話はじゃな」

「はい」

「まことであるな」

「既に首も届いておりますが」

「ふむ」

信長はそれを聞いて袖の中で腕を組んだ。それからまた述べた。

「ではまことであるのだな」

「それがしとて最初は信じられませんでした」

弥三郎自身もそう述べた。

「ですが実際に見ましたので」

「目で見たのか」

信長はそこを聞いてきた。

「その方の目で」

「その通りでございます」

「左様か」

それを聞いてまた黙ってしまった。その顔が考える顔になっていた。

「さすればまことであるう」

「はい」

「わしはこうしたことは信じぬのじゃがな」

一応はそう前置きした。信長はそうした話や迷信の類は一切信じない男であるのだ。これはこの時代からよく知られていることであった。

「じゃがその方が見たというのならまことであるう」

「では話を残しておきます」

「そしてじゃ」

だが信長はここでまた言ってきた。

「何でしょうか」

「その怨みを晴らした女房のことじゃ」

「逆さまの女のことですな」

「左様。その女、さぞかし無念であつたじゃろう」

実は信長は女に対してかなり寛容な男であつた。夫羽柴秀吉の浮気癖に怒るねねに対して彼女を褒め称えつつも嗜める手紙を書いていたりもする。決して苛烈なだけの男ではなかつた。そうした繊細な部分も併せ持っている男なのである。

「じゃがよく無念を晴らした」

信長は言つた。

「厚く供養するようにな。村の者に申し伝えておけ」

「わかりました」

「わしの名でな」

信長はこうまで言い含めた。

「よいな」

「はい、それでは」

「それにしても世の中とはわからぬものじゃ」

信長は話を終えてもそう思うこと至極であつた。それが言葉にも出る。

「逆さまにされてもまだ復讐を果たすとはな」

「人というものでしょう」

「うづむ」

そのうえで弥三郎の言葉に唸ってきた。

「そんなのかも知れぬな」

「げに恐ろしきはその怨念」

弥三郎は信長に対してそう述べた。

「違うでしょうか」

「確かにな。しかしのう」

それでも信長は言った。

「その女よく恨みを果たした。丁重に吊ってやるがいい」
「はっ」

弥三郎はその言葉に頭を垂れた。こうしてこの話は一件落着となった。

これは本当にあつた話である。だがこの話を知る者も信じる者も少ない。しかし女が怨霊となり逆さまになってまでも夫と妾に復讐を果たしたのは話として残っている。実に奇怪であると共に人の業を思わせる話であつた。

幽霊と弥三郎 完

2006・12・21

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9369b/>

幽霊と弥三郎

2009年6月15日22時01分発行